

Glocal Tenri



6

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.20 No.6 June 2019

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
あなたの手は信仰者の手
／高見宇造..... 1
- ・ 日系移民の歴史にみる天理教の北米伝道の様相 (30)
ニューヨークの日系人と天理教伝道①
／尾上貴行..... 2
- ・ 日本語教育と海外伝道 (11)
侵略的日本語教育と国際交流のための日本語①
／大内泰夫..... 3
- ・ キルケゴールで読み解く 21 世紀 (9)
異端ではなく破綻となる悲劇
—その宗教的混乱を超えて
／金子 昭..... 4
- ・ 伝道と翻訳—受容と変容の“はざま”で— (17)
初期仏教に見る「ことば」の諸相⑥
／成田道広..... 5
- ・ コロンビアへの扉—ラテンアメリカの価値観と教えの伝播— (4)
1. ラテンアメリカ基礎知識の話
／清水直太郎..... 6
- ・ 遺跡からのメッセージ (46)
思い出の金閣怒先生・置田雅昭先生
／桑原久男..... 7
- ・ コンゴ社会から見るアフリカ・ヨーロッパ関係試論 (27)
『TINTIN AU CONGO』(『タンタンのコンゴ探検』)
／森 洋明..... 8
- ・ ヴァチカン便り (38)
ノートルダム大聖堂の火事によせて
／山口英雄..... 9
- ・ 2019 年度公開教学講座要旨：『逸話篇』に学ぶ (5)
第 1 講：51「家の宝」
／高見宇造..... 10
- ・ 図書紹介 (112)
『ネパールの民話 チベットの商人他』
／堀内みどり..... 11
- ・ おやさと研究所ニュース..... 12
第 321 回研究報告会 (佐藤孝則)

巻頭言

あなたの手は信仰者の手

おやさと研究所長 高見宇造 Uzo Takami

「令和」の新しい御代を迎え、研究所としても天理教学と伝道への貢献を通して世の安寧に努めて参りたいと、思いも新たにしている。ところで研究所の所長室には様々な来訪者がある。これは私が就任してからも変わらないが、『天理教事典 第三版』を刊行してからは、一般の来訪者に加えて特に天理教学を学びたいという若い世代の訪問が増えたように思われる。教内の皆さんがそうした思いを研究所に寄せて下さるのは有難いことだと思っている。

また一方では、私の研究テーマが「宗教社会福祉」であることを知っておられるのか、若い世代の福祉関係者の訪問もある。特に保育士や高齢者、障害者の福祉施設で介護福祉士として務める人たちである。これは質問と言うよりも相談の色合いが強い。「私は教会長子弟で後継者ですが、今は福祉職に就いています。信仰者としては、これで良いのでしょうか」、また「天理教では福祉の仕事はどのように考えるのですか」という相談がそのほとんどを占めている。いずれも所属教会との関係から生じる葛藤から話を聴いて欲しいというものである。自身としては戸惑うこともあるが、まずは訪ねて下さったことに感謝してお応えをしている。こうした問い掛けは天理教だけではない。私は以前、全国の仏教やキリスト教団の福祉担当者と呼び掛け、天理で「宗教教団福祉担当者連絡会議」を催したことがある。その際も、参加者から同じ声を聞くことがあり、宗派を超えての問題だと感じた。

またこれは天理教でも古くて新しい問題である。昨年、研究所の「研究報告会」において「戦前の天理教農繁期季節託児所報告」を行い、戦前(昭和 11 年)、長野県在住の教会長が地域農村から請われてこの活動に取り組み、大きな成果と高い評価を得た事例を述べた。この教会長も信仰と託児事業の両立で葛藤を持つが、やがて「託児と信仰を両立させ

ようとしたから、悩みが湧いて来たので此の二つは決して別のものではない。大勢の子供たちを抱えていますから、朝夕のお勤めに致しまして、真に己を空しくして、子供達のために祈ることができず」と悟られている。これは今も通じる大切な気づきだと思った。

ところで私はこうした来訪者の相談に対しては、保育士であれば、「あなたが毎日、子供たちを抱き抱えるその手は信仰者の手ではありませんか?」、介護福祉士であれば、「あなたが毎日、食事の介護や排泄のお世話をその手は信仰者の手ではありませんか?」と問い掛けている。するとほとんどの方は、ほっと安堵した顔になる。保育や介護の仕事が神の御用に転化することに気付く瞬間である。これは信仰の覚醒と言って良いのだろうか。「有り難うございます。また明日から頑張ります」とお帰りになる姿に、私自身が励まされている。

こうした問い掛けは以前、信仰上の悩みを抱えた方が、脳性マヒによる最重度の障害のある信者から、「あなたは教祖から 2 本の腕を戴いているんでしょと励まされました」というお話を聞いて考えたことである。葛藤のない専門職はありえない。まして対人援助の職に就く信仰者であればなおさらである。

私は学生時代、マックス・ウエーバーの著作を求めて読んだが、なかでも『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(岩波文庫・上巻、梶山力・大塚久雄訳、昭和 40 年 2 月 10 日発行)にある、「文化発展の『最後の人々』にとっては、次の言葉が真理となるであろう。『精神のない専門人、心情のない享楽人。この無のものは、かつて達せられたことのない人間性の段階にまですでに登りつめた、と自惚れるのだ』と。」(246 頁)の一節からは多くのことを考えさせられた。まずは私自身が「精神のない専門人」にならぬよう自戒しながら、これからも勤めたい。